

戦時下の国民学校

■国民学校と戦時下の教育

昭和16（1941）年、「国民学校令」の施行により、従来の小学校が改組され国民学校（初等科6年・高等科2年）となりました。その目的は「皇國ノ道ニ則リテ……国民ノ基礎的鍊成ヲ爲ス」とされ、修身・団体訓練・武道などを重視する姿勢が鮮明になりました。

濁川村（現新潟市北区）の「濁川国民学校事業計画」からは、子どもたちへの教育にも戦争色が強くなってきたことが窺えます。

【児童綱領】

戦時下の児童のあるべき姿が示されています。「私共ハ 戦フ日本ノヨイ子供デアリマス 御國ニ役立つ体ト心ヲ鍛ヘマス」や「必ず兵隊サンニ負けズ難儀ニ勝抜キマス」などの文面があります。

【毎週行事・毎月行事】

通常の朝会や授業の他、「修練日朝会」「学級検閲」「団体訓練（全校体育・全校修練）」「時局指導」「軍歌練習」などの時間が、毎週必ず設定されています。また、年間行事の中には、「遺族慰問英霊礼拝」「出征兵白衣勇士慰問」「夏季鍛錬・秋季鍛錬・冬季鍛錬」「県外就職児童・軍部進向児童壮行会」などがあります。「防空訓練」は毎月行っていたようです。

■国民学校への軍の駐留

終戦間際の昭和20（1945）年には、新潟港の重要性が一層高まり、軍の部隊が新潟市に駐留することが増えていきました。

【宮浦国民学校（高等科1・2年）】

新潟陸軍輸送統制部（日本海側の重要港湾における輸送・労役・通信などの統制、外部との交渉・調整を担当）が設置されました。全校生徒が長嶺国民学校に移って授業を受けました。

【沼垂国民学校】

船舶工兵第58連隊（新潟港の荷役作業と海岸防衛が任務）の本部が置かれ、校舎のほとんどを兵士が使用しました。長岡空襲の際には「万一の場合の消火を容易にするため」という理由で、「校舎二階の天井板を全てはがす」といった出来事もありました。

本土への空襲など戦争が激化すると、授業内容だけでなく学校を取り巻く環境も本来の姿とはかけ離れていきました。